

浅見千鶴子先生 追悼

浅見先生：その研究と思いと

伊藤葉子

浅見千鶴子先生が残された数多くの著書の中で、最も初期に出されたものに、『ゲシュタルト心理学』（カッツ著・武政太郎共訳 新書館 一九六二年）という訳書があります。版を重ね、先生がお茶の水女子大学を退官された後に第七版が出されました。ここに先生の心理学者としての原点があります。ただし、その生涯をかけて探求してきたのは、「パーソナリティの比較発達」というテーマでした。退官記念に出された『比較発達学』（ブレーン

出版 一九八六年）には、「サル・ヒトから人間へ」という言葉が添えられており、ここに積み重ねてきた知見の集約をみることができます。

先生は、一九一九年に函館で生まれ、旧制東京女子高等女学校（現お茶の水女子大学附属高等学校）・および同専攻科を経て、一九四六年東京文理科大学心理学科に入学。大学時代に、その頃、アメリカで注目されていたネズミの実験に興味をもち、友人二人とともにネズミの実験を始めました。この

友人の一人は、後に、わが国におけるチンパンジーの研究を代表する岡野恒也先生（故人）であり、共著も数多く出版されています。一方、浅見先生はニホンザルを使つての動物実験へと発展させていき、わが国における「比較発達学」という新しい分野の創設者の一人となつていったのです。

このように研究者として先生が歩いてこられた道程を辿ると、真理探究への情熱をもち続けてこられたことに、今改めて感嘆するとともに、お茶の水女子大学の研究室でニホンザルの赤ちゃんを抱いて座つておられた先生の姿が臉に浮かんで、懐かしさで胸がいっぱいになります。そして、教育者として、誠実で高潔な優しいお人柄を思い出します。私たち学生に、「何かおいしいものを食べにいきましよう」といつもごちそうしてください、食べる様子をここにこしてみていらした先生。穂高の別荘で、朝、一緒に散歩した時、珍しい花をみつけて嬉

しそうに教えてくださいました。どこか少女っぽいところのある先生でした。

お茶の水女子大学を退官された後、鳴門教育大学に赴任され、附属幼稚園の園長となられた時期にお会いした際、幼稚園の子どものことを楽しそうに話してくださいました。先生は、ニホンザルの研究を続ける一方で、人間の子どもの発達に関する探求にも真摯に取り組んでこられました。ライフワークとして、子どもの発達相談を長い間続けてこられたのも、発達心理学者として、子どもの健やかな発達を心から願う故でした。ある意味では、比較発達という視点から人間の発達を探求してきた研究の道程は、人間そのものへの深い愛情とその幸福を願う気持ちに支えられたものだともいえます。

二〇〇六年七月二十五日永眠。ご冥福を心からお祈りします。

（元・お茶の水女子大学浅見研究室・岡 葉子）